

# まんだら通信

第250号(通巻284号)

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

平成29年05月 西暦2017年 佛誕2576年 皇紀2583年



## 年寄り笑うな行く道だ

いつか読んだ永六輔さんの本にあった言葉です。

夏近く、開け放されている教室の窓から、海岸で焼いているカジメの、独特の匂いが漂ってきました。すると、もうすぐ弁当が食べられるなど、その時間が待ち遠しかったものです。

海岸から数百メートルの岩礁、ドロタ島のそばで、小さな船が艦載機の機銃掃射を浴びて、船員が海に飛び込む様子を、固唾を呑んで学校の松林から見ていたことがあります。

七十年前の出来事ですが、昨日のように憶えています。

それに引き換え、昨日のことはさっぱり。

今は時間がないけれども、いつか読めるだろうと、毎月買う本が、幕末以来の日本の歴史や、今流行りの原発問題、地球温暖化って本当なの?というような話。

お隣のシナや朝鮮の歴史などその時々で内容は違うものの、十冊から二十冊。月々送られてくる雑誌は、宗教関係二冊やパソコン雑誌に正論とWillとボイスとhandaの都合七冊。

でも実際は、ぎるで水汲みをしているように、読んでも読んでもさっぱり頭に入りません。

探し物は、朝から晩まで、日課になっています。物覚えが悪く忘れっぽいのは若い時からですが、これほどではなかったとつくづく思います。

「あんたも、この年になれば分かるからな」と、以前は先輩に言われましたが、私も八十二歳になつてみると、本当だなあと身にしみて分かります。

去年まで難なくできた軽い作業も、休み休みになりましたし、知らぬ間に耳が遠くなつて、相手の話を何回も聞き返す始末です。

人間みんな、年取れば多かれ少なかれこうなるのだから、嘲り笑うのは将来の自分を笑うことになるのだよ。だから、そうなりたくないければ、今のうちから頭や身体を錆びさせないように心がけた方が良いでしょう。というのが「年寄り笑うな行く道だ」なんです。

お釈迦さまは、相手の身体の様子に応じて、一番相応しい薬を調合して全快させる名医にたとえられます。

そのお釈迦さまが、ブリッジ族の村人にお説きなつた教え『七不衰法』の中に「私が以前話したように、お年寄りを尊敬し、その言葉に耳を傾けることを忘れない限り、この村

は栄え続け、衰えることはないだろう」というお言葉があります。

お年寄りは身体が多少不自由でも、長い年月蓄えた技術や、常識や知恵があります。

若い時には見過ごしがちな、人を思いやる心が、実は自分を幸せにする早道であるなどということは、年寄りだから言えることですね。

昔、家族が一緒に住むことが当たり前だった頃は、囲炉裏端や普段の暮らしの中で、人間としての生き方、「人の話を良く聞く」、「我儘を言わない」、「人生、やまない雨はない」などなど、人としての心構えを自然に伝えることが出来ました。

近ごろは世の中が変つて、家族と離れて暮らすお年寄りもいっぱいいます。

そんな時は、パソコンを使えば万事解決です。南房総市ががんばつてくれたお陰で、光通信という高速の電話回線が使えます。

連休で、お孫さんが帰ってきた人もいることでしょう。「あの時時いた朝顔が芽を出したよ。」とスマートフォンで写してインターネットで送れば、そこから会話が始まります。家族の絆と言いながら、黙っていたのでは丈夫になりませんし、家風も伝えられませんか。何気ない普段のやり取りが、いざという時に生きてくる、私はそう思っています。

『電通総研』というところで、全国の60〜79歳の男女六百人に聞いたところ、60代で57%、70代で23%が友人・知人が増えた。知識が広がった。使つて良かったと回答しているそうです。

パソコンは難しいという人がいますが、ただそう思っているだけのことです。60歳過ぎからつき合い始めましたが、自転車と同じ程度の難しさというものが、私の正直な感想で、惚け防止の妙薬としてこの上ない遊び道具です。

ら、散歩の時に確かめては如何でしょう。

地方によっては『貧乏草』という有難くない名前を付けられ、折ったり摘み取ったりすると貧乏になる、と言われたりするそうですが、花言葉は意外にも『追想の愛』というそうです。

2017.05.09 龍渉



▼今月の野草はハルジオン(春紫苑)【キク科ムカシヨモギ属】です。100年近く前に持ちこまれた帰化植物だそうで、旺盛な勢いが在来の野草を駆逐してしまう恐れがあつて、『日本生態学会』では『侵略的外来植物ワースト100』に指定しているそうです。名前を調べるに当たって悩ましいのは、この野草には、よく似たヒメジョオンがあり、草丈も姿も殆ど見分けがつかないことです。この写真は小さすぎて良く分かりませんが、つぼみの時は枝先が下向きになっているので、実物を見ればすぐに分かります。どちらもこの季節花盛りですか

▼あつという間に、つい先日は立夏。時の流れは新幹線並みです。歳を取つて、次の世に行く時間が近くなつたせい…かも知れないと思っています。

▼上の写真は、以前掲載したことがあるかと思いますが、お釈迦さまご誕生の、ネパール・ルンビニ郊外の朝の風景です。牛ふんを乾かして炊事の燃料とし、能率の悪い田んぼで作った米を食べ、身の回りの菜園で採れた野菜で自給自足の生活をする、文字通り『少欲知足』を実行しています。こういう景色に触れると、何故かホッとして心が穏やかになります。

## 余滴

## につぼん人情小噺

### 第七十六話 キャリア

いまの大学生は大変だそうですね。不景気が続くので、就職氷河期で、学生たちはもう、入学した時から就職活動を始めているんだそうで。

そんななかで、九十パーセントを越える就職率を誇る大学がありましてね、それが、千葉県柏市にある麗澤大学なんですね。

私、このキャリアセンター長をなさっている真殿達という先生と親しくさせて頂いていて、関係で、「いまどきどうしてこの大学の学生は、そんなに優秀なのか」と聞いたんですね。

すると、先生の答えはこうでした。「いや、全員が優秀ではありませんよ。でも、その優秀でない、どうしようもない子を『決して見捨てない』というキャリアセンターの職員全員の精神が、たまたま就職率を上げているだけですよ」

たとえば、パチンコ屋でのアルバイトに熱心で、就職活動をまったくしない学生がいれば、真殿先生は呼び出し、こう言うのだそうです。

「おい、お前、臭うよ」

「なにが、ですか？」

「お前の体臭だよ。パチンコ屋で働くことは悪いとは言わない。立派な職業だ。でも、いまはお前はうちの学生だ。学生には、学生の臭いがある。まず、いったん学生の臭いに戻れ。そうしたら、これからのことを先生は一所懸命相談に乗ってやるから」

もちろん、臭うというのは比喻です。いわば、惰性に流されて生きていくその学生の生活習慣をそう表現したのです。でも、学生は本当に体臭が臭いのかと思って、サウナに行つて、きれいになつてきます。体

がきれいになることは、心が洗われることです。

そこから、先生は就職活動をさせます。もちろん、先生自ら全国を飛び回つて、社長と直接話をします。もちろん、パチンコ屋で一所懸命働いたことがその学生の売り物だということを知っていますから、先生は正直に社長に話します。

すると、「体を汚して働くことを嫌がらない学生なら、うちでぜひ働いてください」と、彼は採用されるのです。

そんな先生が、ある時、自分の講義に私の落語界での兄貴分にあたる三遊亭円福師匠を呼び、「女性のキャリア」について講演させたんですね。前置きが長くなりませんが、今日はそのお話です。

百五十人は入る階段教室で行われたその時間、円福師匠は羽織、着物姿で現れま

す。壇上には、いくつかの机を集め、その上にカーテンをかけ、そして、先生自らインターネットで注文して買った大きな座布団が、いまか、いまかと師匠に乗つてもらおうと待っています。

師匠が出囃子とともに入ってきます。拍手が起こります。

「え、黒板に戒名が書かれておりますが、私は三遊亭円福という噺家でございます。落語家なんです。人生の落伍者なんてことも言われますが……」

全然、笑いが起こりません。授業に来たのに、突然、目の前に羽織姿の「先生」が座布団の上に座っているのですから、呆氣にとられているのでしょう。なかには、珍しい動物を見るように、ジロジロ観察している女子大生もいました。

それにしても、真殿先生、「女性のキャリア」なんていう演題を師匠にやらせるんですから、さすがです。師匠も困っていましたね。

「えー、落語の世界というのは、だいた

い、女性はおかみさんなんですね。まあ、落語のなかに出てきます働く女性といえますと、髪結いか、あとは花魁ですね。花魁、わかりますか。花魁というのは、遊郭で……。どうも言いにくいなあ、今日は。

ま、そういうところ、うーん、ですから、まあ、男性が女性を相手に遊ぶ場所がありましてね、そこに遊びに来るお客さんを騙すんですね。普通、騙すのは、狸か狐と決まっているのですが、尾っぽがなくても人を騙すついで、尾いらん、オイラン、花魁と、まあ、そう呼ばれたつて言いますが……」

教室は、シーン。なかには、しつかりメモをとっている学生もいたりして。

まったく笑いの起きない雰囲気。円福師匠、頭を掻きながら、でも、髪結いのおかみさんとまったく働かない亭主を主人公にした「厩火事」という落語を演じてくれました。

話は、これからです。

講演から数日後、円福師匠が東京・両国の寄席に出演していたときのことです。

「師匠、お客さんです」と言われ、楽屋を出てみると、妙齢の奥さんが「円福師匠ですか」と丁寧な挨拶をします。

そして、その奥様、師匠に意外なことを言つたのです。

「師匠、先日、大学で落語の授業をなさつたとか？」

「はい、麗澤大学というところでさせていただきますました……」

聞けば、その方の子どもさんは、あのとき階段教室で師匠の落語を聞いていた学生のひとりだったそうです。

実はうちの息子は、いつもブスツとして、家ではほとんど口をきいたことがないんです。もちろん、夫と顔があつても挨拶ひとつしない。お恥ずかしい話ですが、わが家はいつも暗いんです。ところが、先

日、珍しく、そんな息子が私たち夫婦に『今日ね、大学で落語家きたんだよ。それでねえ……』とそれは楽しそうに話してくれたんです。これまで、学校のことはもちろん、何にも話さずに食事をしていただけ。ですから、なんだかうれしくて、うれしくて。それで、どうしてもお礼を言いたくて……」

私はこの話を聞いたとき、真殿先生の楽しそうな笑顔を思い出しました。学生の就職活動で、一番大事なのは、その子の家庭に問題がないことです。

(あつ、そうか、先生のほんとうの狙いはここにあつたか)と。